

津山郷土博物館だより「つはく」

# 津 博

TSUHAKU

2021.8 No.109

## トピックス

- ・特別展「津山藩士・飯塚竹斎とゆかりの画人一絵を描いた武士たち」を開催します。
- ・ミニ企画展「世界の布Ⅱー刺繍の魅力ー」開催。
- ・企画展「鋳形蕙斎 江戸一目図とその世界」を開催しました。

## 研究余録

- ・国元日記の編さん 東 万里子

## 資料紹介

- ・考古資料この一点②ー一日上天玉山古墳の二重口縁壺ー 小郷 利幸



津山郷土博物館

Tsuyama City Museum

## 特別展 「津山藩士・飯塚竹斎とゆかりの画人 —絵を描いた武士たち—」を開催いたします。

津山藩士で文人画家でもある飯塚竹斎は藩の御用絵師ではありませんでしたが、すぐれた才能を発揮し、多くの作品を残しています。今回の展覧会ではこの飯塚竹斎にスポットをあて、地元津山に残されている作品を中心に、そのゆかりの人々の作品を展示をします。

### 【会期】

10月16日（土）～11月21日（日）

### 【記念講演会】

11月7日（日）

午後1時30分～午後3時30分

※新型コロナウイルス感染の状況により  
予定を変更する場合がございます。  
ご了承ください。



水墨山水図



双鶴伴雛図

## ミニ企画展 「世界の布Ⅱ—刺繍の魅力—」開催。

【会期】 7月31日（土）～9月5日（日）

津山市文化功労表彰者の三好基之先生が長年にわたり収集されてきた世界の布のうち、今回はウズベキスタンの刺繍布・スザニを中心にイランの刺繍布も展示しています。



## 企画展 「鋏形蕙斎 江戸一目図とその世界」を開催しました。

【会期】 6月22日（火）～7月25日（日）

江戸一目図屏風の複製が展示されている東京スカイツリーの展望デッキで、悪天候のときに上映されている「江戸一目図漫遊記」を特別に公開しました。この映像は、最新のデジタル技術が駆使されており、江戸一目図屏風に描かれている人や舟などが動きます。皆様長時間見入っておられました。

# 「国元日記」の編さん

東 万里子

はじめに

津山松平藩文書の「国元日記」には、津山における重要な出来事が記録されており、元禄十一年（一六九八）から明治四年（一八七二）までのことされている。「国元日記」は、今まで「津山市史」や「岡山県史」を始め、さまざまな研究に用いられてきているものの、「国元日記」自体については、『岡山県史津山藩文書』において「御用所の日記とみてよい」とされ（註1）、約半ページの解説がある程度で、その編さん過程はあまり知られていない。今回は、「国元日記」宝永三年（一七〇六）五月二日の記述を中心に、断片的ではあるが、「国元日記」がどのように編さんされたのか考えたい。

朝倉文左衛門から当番大目付へ

宝永三年五月二日、朝倉文左衛門は参州様（松平綱国）御用を当分承るよう仰せ付けられた。続いて、このように文左衛門が仰せ付けられたので、「向後日記方之御用当番之大目付可相勤由」（写真傍線部①）と命じられた。ここから「日記方之御用」が朝倉文左衛門から当番大目付へ移ったことがわかる（註2）。

朝倉文左衛門について詳細は不明であるが、「国元日記」の記述から、宝永二年三月までに御奏者番席となっていた。前出の当該箇所では、役職が記されず個人名のみを表記となっており、朝倉一人が請け負っていた「日記方之御用」を、この日を境に当番の大目付という役職が勤めることになったと考える。

では、編さんはどのように行われていたのだろうか。

編さん方法

「国元日記」宝永三年五月二日の前出の箇所にはひきつづき「日記方之御用」について、「御用向御用番御年寄中右可為演説候」（写真傍線部②）とある。ここから、日記の御用向きについては御用番御年寄から説明や指示があったこと

とがわかる。そしてその続きをよむと、御年寄の指示だけではなく、担当である大目付も気をつけておき、お伺いをたてながら日記に記させるべきという日記編さんの方針を読み取ることができる。

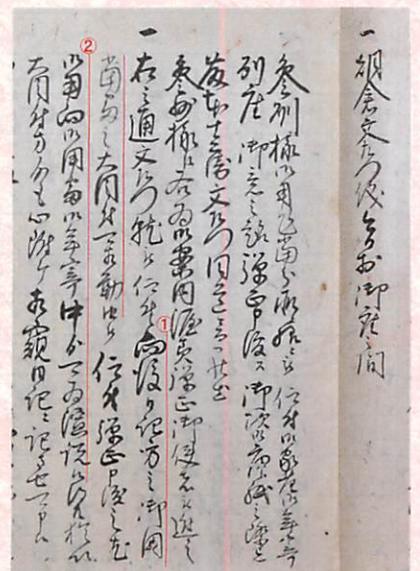
宝永六年三月二十八日には、「御領分寺社願書只今迄者日記二留来候得共、御奏者番方二本書有之上者、向後日記二留候二不及之旨、今日於御用所御用番より藤本十兵衛承之ニ付、向後可略之候」とある。寺社願書について、御奏者番方に記録があるのだから、今後は日記に記す必要がないことが御用番から大目付である藤本へ示されている（註3）。ここから「国元日記」に記すべき内容について、実際に御用番が大目付へ指示している様子を知ることができる。

また、「町奉行日記」明和四年（一七六七）四月九日の町人の帰住宅願の伺い、八月九日の追込差免の伺いについて、大目付は「御日記」に記録しないという判断をしたという記述がある。町奉行からみて「御」をつけるべき日記は「国元日記」であると推測され、大目付が「国元日記」に記録する事柄をある程度取捨選択しているのではないかと考えられる。

おわりに

「国元日記」の編さんについて、宝永六年以降は、御用番御年寄などの指示により、大目付が中心となって行っていたことがわかった。この状況がいつまで続くかはわからないが、寛政元年（一七八九）七月八日には、大目付と書役が「御日記二認方不宣」という理由で差し控え伺いを出しているから、この時期も「国元日記」の編さんの中心に大目付がいたことがわかる。また、文化六年（二八〇九）に焼失した「国元日記」の再編にあたって担当となったのも大目付であった（註4）。

今後は、より詳細な編さんの過程に迫ってきたい。



「国元日記」宝永3年5月2日

（註1）『津山温知会誌』第十三編「文定公御初入天保三年壬辰五月十八日御着城当日御用所日記写」の内容と「国元日記」の該当部分がほぼ一致するので、『津山温知会誌』が出版されたころから「御用所日記」「国元日記」という認識だったことがわかる。

（註2）「国元日記」は目録分類上付されている名称であり、実際の表紙には「日記」とだけ記されているものが大半を占めている。よって「国元日記」中において「国元日記」について記されるときには「日記」「御日記」と表記される。他の日記について記述する場合は、「町奉行日記」など役職名とともに表記される。

（註3）実際に三月二十八日には約七件にも及ぶ寺社からの願いについての記述があったが、以降この日ほど多く寺社の願いについて記述された日はない。他の奉行との関係があるものや、修復に関するものが中心となっている。ここから、「国元日記」中に出てくる「日記」という表現が、他の日記ではなく「国元日記」をさしていることを再確認することができる。また、藤本十兵衛はこの年の十二月二十三日に「大目付 藤本十兵衛」と出ている。勤書ではこの時期大目付役を勤めたのは藤本伴右衛門となっているが、「藤本十兵衛」とある国元日記の褒賞記事と勤書の同記事の日時などが一致するから、伴右衛門が十兵衛と名乗っていたことがわかる。

（註4）「焼失した国元日記」（津博No.78）

# 考古資料この一点② ―日上天王山古墳の二重口縁壺― 小郷利幸

はじめに

津山郷土博物館古墳時代の展示コーナー最初の所に、土師器壺の口縁部のみが展示されている（写真1）。日上天王山古墳出土の二重口縁壺の一部である。口縁部のみで全体は復元できていないので少々わかりにくいですが、これに丸い胴部がつく。類例も少ないので、美作地域などの類例も含めて紹介したい。



写真1 二重口縁壺

と箱式石棺2基が、後円部の墳丘上から検出された。中心の石槨は残念ながら盗掘を受けていて、副葬品はほとんど無かったが、第2石槨からは、鏡（振文鏡）1面と鉄器が出土した。本壺（図1―1）は、くびれ部付近のトレンチから出土しており、おそらく墳丘上に立てられていたものが転落したと推測される。胴部の破片もあるが、復元できるほど破片がない。頸部は逆ハの字に直線的に開きほぼ水平に屈曲して口縁がつく。比較的薄手に作られており、色調は暗褐色、3mm角の砂粒を多く含む。胴部の破片の外面調整は不明である。

### 美作地域二重口縁壺の様相（表1・図1）

美作地域で二重口縁壺が出土した主要な古墳は表1のとおりで、図1に集成している。

1の日上天王山古墳は、美作地域では最古の部類に入る古墳で、その次にくるのが

2・3の津山市田邑丸山2号墳（註2）などとなる。田邑丸山2号墳は、全長40mの

前方後方墳で、埋葬施設は竪穴式石槨であるが盗掘を受けている。副葬品として三角

縁軒鏡など複数の鏡が出土したとされるが、所在は不明である。平成9年に確認調

査が実施された。その際に墳丘をめぐる葦

### 資料紹介

本壺は、津山市日上に所在する日上天王山古墳の調査で出土した。調査は平成6年に本市教育委員会と大学関係者により組織された日上天王山古墳発掘調査団によって確認調査がおこなわれた（註1）。本墳は全長56・9mの前方後円墳で、川原石による葦石がめぐり、埋葬施設は竪穴式石槨2基

No	古墳名	墳形(規模:m)	時期	出土場所	図1	註
1	日上天王山古墳(津山市)	前方後円墳(56.9)	前期	くびれ部	1	1
2	田邑丸山2号墳(津山市)	前方後方墳(40)	前期	墳丘全体	2・3	2
3	奥の前1号墳(津山市)	前方後円墳(68)	前期	くびれ部	4	4
4	赤峪古墳(鏡野町)	前方後円墳(45)	前期	後円部木棺外	5	5
5	川東車塚古墳(真庭市)	前方後円墳(59.1)	前期	墳丘全体	6	6
6	久米三成4号墳(津山市)	前方後方墳(35)	前期	くびれ部	7	7
7	近長丸山1号墳(津山市)	円墳(20)	前期	土器棺	8	10
8	近長丸山2号墳(津山市)	方墳(12)	前期	周溝内	9	10
9	近長丸山3号墳(津山市)	方墳(7.8)	前期	周溝内	10	10
10	東花穴1号墳(鏡野町)	方墳(14.5)	前期	土器棺	11	11
11	東花穴2号墳(鏡野町)	方墳(6.3)	前期	周溝内	12	11
12	有本7号墳(津山市)	方墳(15.8)	前期	土器棺	13・14	12
13	兼田丸山古墳(津山市)	不明	前期	箱式石棺内	15	13

表1 美作地域二重口縁壺出土古墳一覧

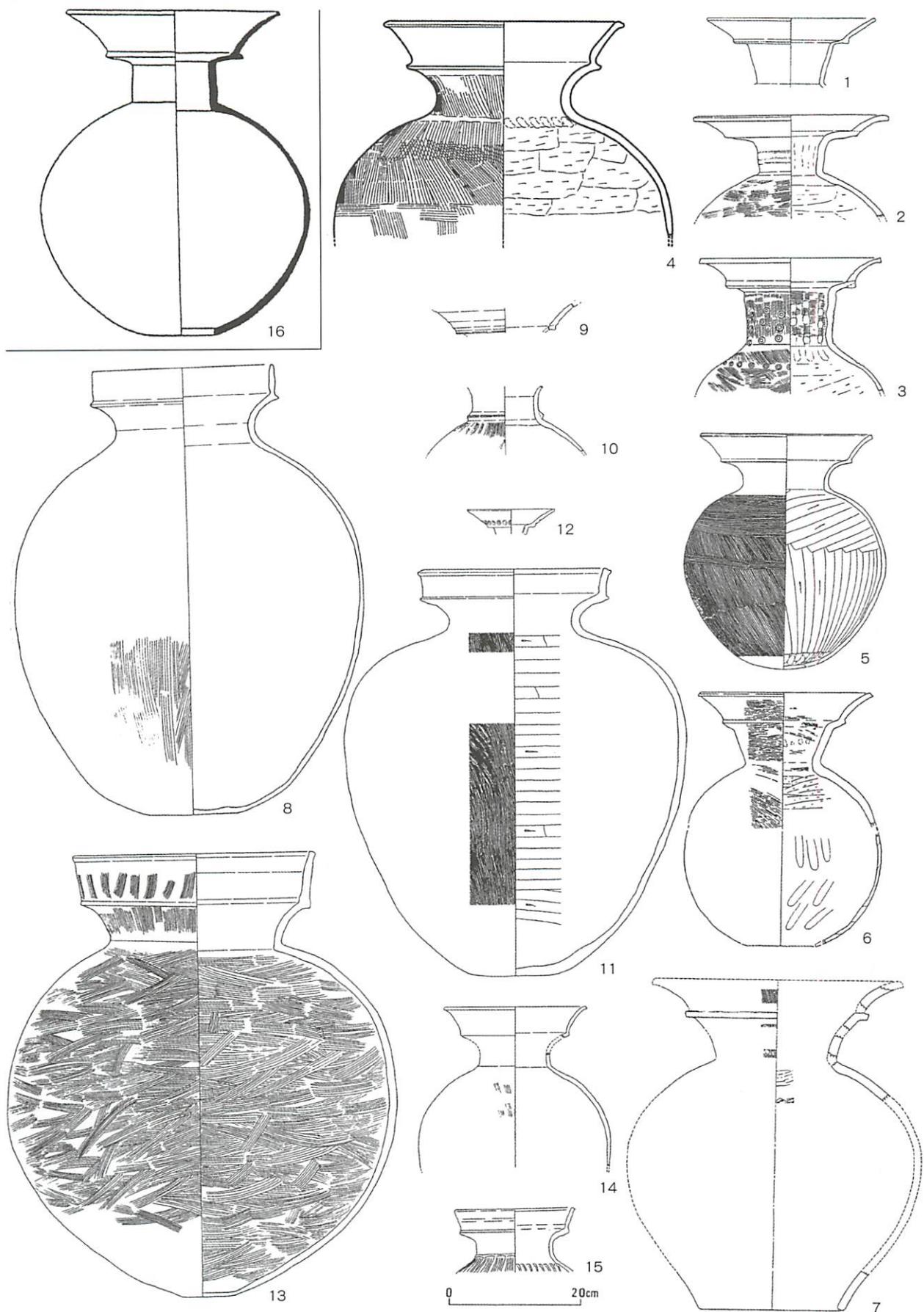


図1 美作地域と畿内の二重口縁壺(S=1:8)

石が確認され、その周囲から壺が出土した。壺はかなりの個体数あり、頸部がやや逆ハの字に直線的に開き、水平に屈曲し外反する口縁がつく。頸部の長さにより2つのタイプのものがある。頸部から胴部にかけての外面にハケが施され、さらにその部分に竹菅文を施したのも見られる。胴部の内面はヘラ削りである。この竹菅文を施す土器は、山陰地方や播磨地方に見られる特徴でもある(註3)。

4は津山市奥の前1号墳(註4)出土で、石棺から鏡などの出土が知られており、確認調査がその後実施された。全長68mの前方後円墳で埋葬施設は後円部に石棺と前方部に木棺がある。石棺からは鏡(内行花文鏡)、鉄鏃、短甲などが、木棺からは鏡(内行花文鏡)、鉄刀や玉製品が出土した。壺はくびれ部から出土し、頸部が直線的では無く外反して開き口縁がつくタイプである。頸部から胴部外面はハケ、胴部内面はヘラ削りである。これはかなり大形の壺であるが、これ以外に口縁が垂直に立ち上がるさらに大形のものもある。

5は器形全体がわかるもので、鏡野町赤峪古墳(註5)出土で、確認調査が実施された。全長45mの前方後円墳で埋葬施設は後円部に木棺と前方部に箱式石棺がある。木棺から鏡(盤龍鏡)、勾玉などが出土し、その近くから壺が出土している。壺の頸部は4と同じく外反して開き口縁がつくタイプである。底部は丸底で1箇所穿孔がある。

胴部外面にはハケが見られ、肩付近にはヘラによる文様が巡り、内面はヘラ削りである。

6は真庭市川東車塚古墳(註6)出土で、確認調査が実施された。全長59・1mの前方後円墳で埋葬施設は粘土槨である。盗掘をうけており、鏡片、刀子が出土した。壺は墳丘全体から出土し、個体数も多い。頸部は逆ハの字に直線的に開き、屈曲して口縁がつき、胴部は球形に近いタイプに復元される。外面全体と内面頸部までにヘラミガキを施し、底部は丸底とならず穿孔が見られる。

7は津山市久米三成4号墳(註7)出土で、発掘調査が実施された。全長35mの前方後方墳(註8)で、後方部と前方部にそれぞれ箱式石棺がある。後方部から人骨2体と鏡(変形四獣鏡)、鉄剣、勾玉などが、前方部からは2体の人骨のみ出土した。壺はくびれ部付近から出土し、破片からの復元であるが、外反して開く頸部に口縁がつき、底部が丸底にならないタイプである。また、最近では人骨の年代測定結果も報告され、4世紀中頃から後半の時期が指摘されている(註9)。

以上が前方後円墳、前方後方墳の類例である。二重口縁壺は概ね頸部が直線的に開くものから外反するものに、底部は明瞭ではないが丸底に穿孔が見られるものから底がなくなるものに変遷する。また、確認調査が多いため明瞭ではないが、田邑丸山2

号墳や川東車塚古墳はこれら二重口縁壺の個体数が多く、墳丘全体からの出土が見られるものの、日上天王山古墳やその他の古墳はそれ程多くない。ただくびれ部付近の出土や埋葬施設付近が多いことから、少なくともくびれ部を中心とした墳丘上に配置されていたと推測される。

次に円墳、方墳の事例を見てみたい。

8は津山市の近長丸山古墳群(註10)出土で、発掘調査が実施された。8は直径20mの円墳の土器棺、9は一辺12mの2号墳、10は一辺7・8mの3号墳出土である。8は頸部は外反して開き、垂直に立ち上がる口縁で、胴部が卵形で平らな底部がある。胴部外面にはハケが見られる。9は口縁部片、10は頸部がほぼ垂直に立ち上がり、胴部との境に断面三角形の貼付け突起がつき、胴部外面にはハケが見られる。

11・12は鏡野町東花穴古墳群(註11)出土で、発掘調査が実施された。11は一辺14・5mの1号墳の土器棺に使用された。頸部は外反し開き、垂直に立ち上がる口縁で、やや肩の張った胴部で平らな底部である。胴部外面がハケ、内面がヘラ削りである。12は一辺6・3mの2号墳の周溝内から出土で1に近い口縁部片で外面に竹菅文がめぐる。これは1号墳からの流れ込みの可能性もある。

13・14は津山市の有本7号墳(註12)出土で、発掘調査が実施された。一辺15・8mの方墳で、別々の土器棺に使用されてい

る。13は頸部が外反して開き、口縁が垂直に立ち上がる。胴部が球形に近く、胴部の内外面ともハケで、平らな底部をもつ。14は頸部は外反して開き、口縁が付くタイプで5に近い。胴部外面はハケである。

15は津山市兼田丸山古墳(註13)出土で墳丘形態は不明である。明治時代に箱石式棺が2基検出され、その内の1号石棺内から出土した(枕に使用か)。やや直線的に立ち上がり、外反して口縁がつく。胴部外面はハケ、内面はヘラ削りである。

以上、円墳や方墳の例はこれら壺を棺桶として使用したものが多く見られ、土器棺用に特別に作られた、大形のもののようにある。いずれも口縁がほぼ垂直に立ち上がり、胴部は肩が張るもの、卵形や球形に近いものなど様々なタイプがある。11は肩が張りやや古いタイプのものであるが、これらの中には時期差もあるが、口縁や胴部の調整に地域色がかなり見られるようである。二重口縁壺については、前方後円(方)墳に見られたように墳丘上に並べられたものもあるが、円・方墳では土器棺使用例が見られることから、前方後円(方)墳の場合とは、若干使用方法が異なっているものがあるようである。

参考までに畿内の二重口縁壺の例を16に示している。これは奈良県桜井市の桜井茶臼山古墳(註14)の壺である。桜井茶臼山古墳は全長207mの前方後円墳である。壺は頸部が直線的に立ち上がるタイプで1

や3は頸部から上の形態が良く似ている。

また、畿内地域の二重口縁壺は、口縁部の接続形態から分類変遷する(註15)とされており、筆者はそれに照らし合わせて美作地域の諸例を以前に検討したことがある(註16)。それによると、日上天王山古墳や田邑丸山2号墳、川東車塚古墳のグループから久米三成4号墳に変遷するようで、美作地域も大筋には畿内とほぼ同様な変遷がおえると考えている。

以上、美作地域の特に前期古墳の二重口縁壺の特徴と変遷について述べてきた。さらにこれら壺を伴う古墳には、埴輪はほとんど見られない特徴があり、これは前方後円(方)墳以外の円・方墳にも言えることのようにある。

また逆に埴輪を伴う美和山1号墳(全長80m、註17)や先述した奥の前1号墳などは、後者は壺を伴うものの、個体数もそれほど多くはなく、いずれも埴輪が主体と言いうことができる。このことから、美作の前期の首長墳においては、土師器二重口縁壺のみと埴輪(一部で壺を伴う)をもつ2系列が存在すると考えている。ちなみに日上天王山古墳のような二重口縁壺の場合で言うと、日上天王山古墳↓田邑丸山2号墳↓赤峪古墳とおおまかに変遷する。これらの下に近長丸山古墳群や有本古墳群の円・方墳が位置する構図が読み取れる。ただ、赤峪古墳のような全長45mクラスの古墳で言えば、例えば加茂川流域の近長四つ塚2号墳(前

方後円墳、45m、註18)や滝川流域の田井高塚古墳(前方後方墳、42m、註19)のように、河川の支流域ごとにある程度見られることから、二重口縁壺の出土は知られていないものも多いが、これら河川の支流域ごとに45mクラスの前方後円(方)墳を頂点とし、その下に円墳・方墳が見られるといった序列が、水系ごとにある程度整っていたことが推測される。

#### おわりに

日上天王山古墳の二重口縁壺の紹介をかねて同様な壺の変遷を考えた。さらに美作地域の前期首長墳においては、これら二重口縁壺のみと埴輪(一部で壺を伴う)をもつ2系列が存在することを指摘した。前者は畿内の二重口縁壺の変遷にも同調しながら、小形の円・方墳にも見られることから、在地的な支配体制の産物として捉えることができる。逆に後者は埴輪といった新規の産物を伴うもので、吉備地方南部の埴輪を持つ古墳との関連性が考えられる。特に美作では時期的な変遷の中では、盟主的な大形前方後円(方)墳にのみ埴輪が見られるようである。この場合も古墳の規模でいえば、吉備南部ではこの時期全長が100mを越すものが多く見られる(註20)のに対し、美作では最大でも80から90mに制限されているようである。ここに当時の政治的な支配体制の一端が如実に反映されているようであり、これについては稿をあらためたい。

註

- (1) 津山市教育委員会・日上天王山古墳発掘調査委員会1997「日上天王山古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集』
- (2) 津山市土地開発公社・津山市教育委員会2000「田邑丸山古墳群ほか」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第67集』
- (3) 註(2)
- (4) 澤田秀実2020「奥の前1号墳」『新修津山市史資料編考古』
- (5) 鏡野町史編集委員会・鏡野町教育委員会2000「赤峪古墳」『鏡野町埋蔵文化財発掘調査報告第6集』
- (6) 倉林真砂人ほか2004『川東車塚古墳の研究』吉備人出版
- (7) 岡山県教育委員会1979「久米三成4号墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告30』
- (8) 筆者は本墳について方墳2基の可能性を述べたことがある。その後周辺地域で前方後方墳が発見された事などから、ここでは前方後方墳として取り扱う。
- 小郷利幸1991「久米三成4号墳」『前方後円墳集成中国・四国編』
- (9) 清家章・坂本稔・瀧上舞2021「岡山県内古墳出土人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告第228集』
- (10) 津山市教育委員会1992「近長丸山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第41集』
- (11) 立石盛詞2000「東花穴古墳群」『鏡野町史考古資料編』
- (12) 津山市教育委員会1997「有本古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第59集』
- (13) 本村豪章1974「美作・津山市兼田丸山古墳出土遺物の研究」『MUSEUM No.285』
- (14) 奈良県教育委員会1961「桜井茶臼山古墳―附櫛山古墳―」
- (15) 野々口陽子1996「いわゆる畿内系二重口縁壺の展開」『京都府埋蔵文化財論集第3集』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- (16) 註(2)
- (17) 津山市教育委員会1992「史跡美和山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第42集』
- (18) 小郷利幸1995「近長四ツ塚古墳群墳丘測量調査報告」『年報津山弥生の里第2号』
- (19) 倉林真砂人2000「田井高塚古墳」『美作の首長墳』吉備人出版
- (20) 例えば岡山市の中山茶白山古墳(前方後円墳・全長約105m)、尾上車山古墳(前方後円墳・全長約138m)など



博物館だより「つはく」  
No.109 令和3年8月31日



【編集・発行】 津山郷土博物館  
〒708-0022 岡山県津山市山下92  
Tel (0868) 22-4567  
Fax (0868) 23-9874  
E-mail tsu-haku@tvt.ne.jp

【印刷】 有限会社 二葉印刷

### 入館のご案内

【開館時間】 午前9:00～午後5:00  
【休館日】 毎週月曜日・祝日の翌日  
年末年始(12月29日～1月3日)・その他  
【入館料】 一般…300円  
(30人以上の団体の場合240円)  
高校・大学生…200円  
(30人以上の団体の場合160円)  
65歳以上…200円  
(30人以上の団体の場合160円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方は入館料が無料です

土は、津山松平藩の槍印で剣大といい、現在津山市の市章となっています。